

皆さんは普段、ドラえもんをどんな種類の本で読んでいますか？ F先生の全作品を網羅している大全集、コンビニで売られているお買い得なマイファーストビッグ、季節ごとに発売される分厚い冊子の総集編など、たくさんの種類があります。ですが、ドラえもんのマンガで一番多く読まれているのはやはりてんとう虫コミックスではないでしょうか。なにしろ、雑誌以外で初めてドラえもんを読める本として1974年に発売され、今や総発行部数は8800万部を超えています（2020年6月現在）。ドラえもんを代表する単行本だと言ってもかまいません。

では、てんとう虫コミックスに載っているドラえもんの話は、雑誌の連載順に掲載されていないことはご存じですか。名探偵コナンやワンピースなど、大抵のマンガの単行本は雑誌で掲載された順に並んでいる場合が多いので、意外だと思われる人もいるかもしれません。というのも、ドラえもんは当時「小学一年生」～「小学六年生」までの学年誌で並行して連載されていたので（一部の学年で連載されていない時期もあります）、連載順に掲載してしまうと話の対象年齢が偏ってしまうと考えられます。また「少年サンデー」や「てれびくん」など学年誌以外の様々な雑誌に掲載されていたので、それらで載せられた話も入れる必要があります。

それでは、単行本に載せる話の順番は一体どのように決められたのでしょうか。実は、原作者であるF先生が自ら掲載する順番を決めていたのです。「ほぼ日刊イトイ新聞」の100年ドラえもんに関わった方のインタビュー記事では、ドラえもんの単行本には春夏秋冬の流れがあったり、似たようなひみつ道具が連続して出てこなかったり、ベストセレクションとしての単行本の魅力が語られています。

さて、そんなF先生のこだわりが詰まった単行本ですが、その一番始めにくる話を集めた「ドラえもん巻頭まんが作品集」という本があります。どの話もトップバッターの作品とあって、インパクトがありバラエティーに富んでいます。しかし、単行本の最後にくる話をまとめた「ドラえもん巻末マンガ作品集」は出版されていません。最後の話というのは言わばその巻を締めくくる重要なものですから、F先生も熟考して選んだに違いないはずです。そこで今回は巻末の話のリストを作ると同時に、それらの話にはどんな特徴があるのかを考察したいと思います。

巻数	タイトル
1	走れ！ウマタケ
2	出さない手紙の返事をもらう方法
3	ペロ！生きかえって
4	おばあちゃんのおもいで
5	ぞうとおじさん
6	さようなら、ドラえもん（ドラえもん百科）
7	山おく村の怪事件
8	くろうみそ
9	ぼく、桃太郎のなんなのさ
10	のび太の恐竜
11	ジャイアンの心の友（ドラえもん大事典）
12	ゆうれい城へ引っ越し
13	ハロー宇宙人
14	夢まくらのおじいさん
15	あやとり世界
16	宇宙ターザン
17	モアよドードーよ、永遠に
18	タンポポ空に行く
19	あの窓にさようなら
20	超大作特撮映画「宇宙大魔神」
21	精霊よびだしうでわ
22	のら犬「イチ」の国
23	大あばれ、手作り巨大ロボ
24	ションボリ、ドラえもん
25	のび太の結婚前夜
26	タイムカプセル
27	しあわせトランプの恐怖
28	しんじゅ製造アコヤケース
29	まんが家ジャイ子先生
30	ハツメイカーで大発明
31	ためしにさようなら
32	しずちゃんさようなら
33	さらばキー坊

34	水たまりのピラルク
35	ドンジャラ村のホイ
36	天つき地藏
37	大人気！クリスチーネ先生
38	スネ夫の無敵砲台
39	虹のビオレッタ
40	しずちゃんをとりもどせ
41	深夜の町は海の底
42	宇宙完全大百科
43	ジャックとベティとジャーニー
44	ブラック・ホワイトホールペン
45	ガラバ星からきた男

皆さんはこのリストを見て何か気づかれたことはあるでしょうか。この話は最後がふさわしいな～と納得するものや、この話最後だったんだ！と驚くようなものもあるかもしれませんが、では、考察に入っていきます。

第一に、話の規模が大きな話が多いと考えられます。規模が大きいというのはあらゆる意味を含んでいます。例えば、単純にページ数が長い話だったり、いつもの5人だけでなく特別なゲストキャラが絡んできたり、のび太の町一帯を巻き込んだ話だったり、のび太の町に限らずそれ以外の場所が話の舞台になったりしています。それに関連して大長編や映画の元となった話が多いとも言えます。例えば、「のら犬「イチ」の国」は「のび太のワンニャン時空伝」、「さらばキー坊」は「のび太と緑の巨人伝」の元となっています。さらに「のび太の恐竜」はこの話そのまま肉付けされて大長編になっています。

このように、読み応えのある作品を最後に持つてくることで読者の満足感を得るという効果があると考えられます。

第二に、ドラえもんの世界観を掘り下げている話が多いと思われます。これはF同の部員の方とリストを見ていたときに指摘されたことなのですが、僕的にはとてもしっくりきました。例えば、「のび太の結婚前夜」や「しずちゃん、さようなら」など、のび太としずかちゃんの間をさらに深めている話があります。タイトルからは分かりませんが「宇宙完全大百科」では、のび太としずかちゃんが結婚した証拠の写りが出てきたりします。また、「まんが家ジャイ子先生」や「虹のビオレッタ」などはジャイ子が主役となる話ですが、単にのび太が回避すべき結婚相手という存在から抜けだした漫画家としてのジャイ子の成長譚が描かれています。「シヨンポリ、ドラえもん」や「ハツメイカーで大発明」はのび太とドラえもんの友情に注目したエピソードだと言えます。「さようなら、ドラえもん」はドラえも

んがのび太の側にいるという日常が消えてしまう、言うまでも無くドラえもんの中で最重要の話の一つです。

ドラえもんの話は基本的には一話完結型ですが、単行本を通して少しずつ歴史が進んでいるのが感じられます。そのような、ドラえもんのストーリーマンガとしての一面もF先生は見てほしかったのではないのでしょうか。

第三に、読後感のよい話がちらほらあるなど感じます。

「あの窓にさようなら」や「精霊よびだしうでわ」のようにもの悲しくも爽やかに終わる話や、「走れ！ウマタケ」や「タンポポ空を行く」などの読者の背中を押すような話です。これらの話が最後にくることで、マンガを気持ちよく読み終わることができます。

第四に、特殊な話が最後に置かれていると思われまます。

例を上げると、「ぼく、桃太郎のなんなのさ」は当時F先生が連載していた「バケルくん」とのコラボ企画「ドラとバケルともうひとつ」で描かれた特別編ですし、「ガラパ星からきた男」はドラえもんとしては異例の3回に分けて連載された作品です。また、「ブラック・ホワイトホールペン」はごくごく日常の短編なので一見すると特殊な話ではありません。ですが話のタイトルになっているこの道具、実はコロコロコミックで行われた「ドラえもんひみつ道具アイデアコンテスト」で読者が考えたひみつ道具だったのです。読者が関わっているこの話を最後の話を選ぶという所に、F先生のサービス精神が感じられます。

以上が、ドラえもん単行本の巻末にくる話の考察になります。色々な種類の話が並んでいるので思ったよりも特徴を探るのが難しかったです。なので、少々こじつけっぽい部分もあったかもしれませんがご容赦ください。なんとなくこういう系統の話が多いなというのを知っていただければ幸いです！

では、これから先の未来も「ドラえもん」が読み継がれることを祈って、終わりたいと思います。